

# Over Seas

## 日本に留学して

### 文字体系としての日本語漢字の分類に関する研究

テリー・ジョイス



Terry Joyce  
筑波大学大学院心理学博士課程在学。  
イギリス出身。  
1994年シェフィールド大学日本学課程修了。95年来日。  
95~97年筑波大学文芸言語研究科研究生。97年同大学院心理学博士課程入学。  
専門は、言語心理学。

私は、文字体系、とくに文字体系としての日本語漢字の分類に絡んでいる問題について研究するために、旧文部省（現文部科学省）の奨学生として1995年に日本にきました。

日本の文字体系は、現代の文字体系の中では、いちばん複雑なものであるとよく言われています。日本の文字体系がきわめて複雑であるというイメージの1つの理由は、異なる種類の文字が混ざっていることです。もう1つの理由は、日本語の漢字の場合、読み方が音読みと訓読みで2種類あることです。しかし、このイメージの主な原因は、文字体系としての漢字の分類についての議論であると思います。残念ながら、言語学における比較的無視された文字体系の研究は、表記の役割についての意見の違い（たとえば、Bloomfield [1933]によると、文字は単に話し言葉〈speech〉の転写でしかありません）や、用語の妥当性についての議論などに苦しめられてきました。用語についての議論の多くは、とくに pictograph（象形文字）、ideograph（表意文字）、logograph（表語文字）などのように、異なる時期に漢字（中国語でも、日本語でも）に対して使用された用語に関係しています。漢字は中国から日本にきました。また漢字の流入とともに、中国語から多くの単語が日本語に入ってきました。このこともあり、日本語での漢字

の使い方は、非常に興味深いです。日本語の漢字は、文字体系、または言語そのものの理解のために、たいへん重要な研究対象です。

私が日本に来たときは、具体的な研究計画がありませんでしたが、しばらく勉強しているうちに、文字体系としての漢字の分類に関する問題のために、心理言語学的なアプローチの必要性を感じるようになりました。すなわち、漢字の成り立ちと漢字の構成などの歴史的な課題に焦点を集めることより、むしろ漢字が実際に使用されていること、漢字二字熟語の造語原則を参考として漢字の組合せを理解すること、それらのことが単語の処理にどのくらい反映しているか、等々のことを検討するほうが重要であると考えようになりました。

そのために、心理学の勉強を始めました。そして、太田信夫先生にはじめてお会いして相談し、筑波大学心理学研究科の入学試験を受験することにしました。1997年に、無事、入学することができました。そのときから今まで、太田先生のご指導のもとで、日本語の心的語彙における漢字二字熟語の表象について勉強してきました。

心理言語学においては、心的語彙の構成と整理、とくに多数形態素単語（polymorphemic words）の表象に多くの興味があります。語形変化（inflection）や派生（derivation）が大切である英語

や、オランダ語やイタリア語などのような欧州の言語と比べて、日本語では、複合語・熟語（compounding）がきわめて重要な要素になっています。そのため、日本語の多数形態素単語（熟語）の表象についての研究は、その他の言語で行われた研究に対しても大変有効な示唆を与えたいと思います。また、形態素文字（morphographic）である漢字、音節文字（syllabic）である仮名、音素文字（phonemic）であるローマ字という異なる文字種類の特異な混合で、日本語の文字体系は、単語認知研究に重要な貢献ができ、文字の特徴への貴重な洞察が得られると思います。

日本語の心的語彙に関する研究、および刺激として漢字表記単語を用いている単語認知研究が、文字体系として日本語漢字の分類に関する問題を明らかにすること、また文字体系についての言語学的な研究を促すことができるように、心から希望しています。